The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	デザインにおける創造性の問題 : 技術論からのアプローチ
Author(s)	羽生, 清
Citation	デザイン理論. 1972, 11, p. 24-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53676
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

デザインにおける創造性の問題
——技術論からのアプローチ——

羽　生　　清

はじめに

現在，デザインは産業政策の要に，或いは文化運動として，その力を拡大しているかのように見えながら，デザインに従事している人々を襲う避け難い危機感は何であろうか。それは，デザインを生活の中から，生きていることの問いかけの中から生みだし得なかった日本のデザインの悲劇のように思われてならない。

デザインの創造性はその美的契機にのみあるのではない。また機能性や使い勝手の工夫の中にあるのでもない。加工技術や材料の新しさにあるのでもない。システムの創造，環境の創造にのみあるわけでもない。しかし，同時に，それらすべてを含むものである。

このようなデザインの創造性の構造について，神ならぬ人類の創造が決定的要件として関わってきた技術の問題に徴して考察してみたい。そこに技術的実存として生きることを余儀なくされている現代人の生活の中に滲透したデザインを顕在化させてみたい。

1.　技術の哲学

我々は技術的世界の中に生き，技術の恩恵に浴しておりながら，技術につい

て考える時それを単なる手段として軽視しがちである。技術に対するこれ程大きな迷妄はない。技術の本質が，人間の目的理念とそれを世界の中へと顕現化する独自のデモニーの中にあることを理解しなければならない。

カントの「第三批判」が，判断力の問題を扱っているのは周知のことである。特殊を普遍に徴する判断力一般の能力は，悟性認識や理性認識の能力と比較した場合，そこに媒介的で技術的なものを見いだすことができる。感性界に関わる悟性認識と超感性界に関わる理性認識とが事とする自然概念と自由概念を媒介するものが，判断力の根底に置かれている自然の合目的性という先験的原理である。この自然の合目的性という概念は，自然概念でもなければまた自由概念でもなく，対象を何かあるものに帰するのではなくて，完全な連関に保つような一個の経験に達するために，我々が自然における対象を反省する場合に従わねばならない唯一の仕方を示すにすぎない，とカントは述べている。(Kritik der Urteilskraft Einleitung V, S. 20)

ここから，判断力の根底になっている自然の合目的性という概念は，世界を綜合的な連関を持つものとして理解するための方法であり，いわばひとつの根源的な技術であるとみることができる。現代科学の隆盛は，機械的因果関係の果に有機体誕生の秘密をも解くかの観がある。しかし，分析に分析を重ねて解体された諸要素を今一度統一しうるものは，目的論的な連関性である。科学はある意味で分析的たらざるを得ない。技術は逆に，分析によって得られた科学的知識を目的設定の下に統一するものであり，その合目的性について常に問われている。言いかえるならば，それが完全な連関を保っているかどうかが問題になる。そしてこの連関性の原型を，人は有機的自然の中の合目的性に見ているのである。従って技術は有機的自然に対立するものではなく，技術の根底に自然的なものがあり，逆に自然の深奥に技術的なものが見いだされるのである。

カントの「判断力批判」の中に世界成立の根源としての技術についてかいまみた後，具体的な機械技術をデッサウェルの技術哲学の中に探ってみよう。カ

ントの具体的な技術が手工芸に留るのに対して，デッサウェルの技術は機械技術のダイナミズムを捉え，それをカントの経験科学の王国，意志と道徳の王国，美と目的の王国の上に，新しい第四の王国を打ち建てるものとしている。デッサウェルによれば，技術は人間の側の目的と自然の側の機械的因果性とを組み合わせることから連続的に生じてくるものではない。彼は技術的作業に固有な本質は，〝質との出会い〟〝質の発明〟〝質の獲得〟とも言うべき新しい契機の中にあると考える。技術の中核をなしている，この新しい質の発明は，人間の側がつくりだすものではなく，また自然必然性の側から生ずるものでもなく，突然に襲う出会いであるという。それは，我々を越え，また自然をも越えた技術の第四王国の中に予め確立しているものとの再会であると彼は主張する。カントの三つの王国を継承して，デッサウェルはこの技術の予定された解決形態の総括を第四王国と名づけたのである。

技術的対象は，自然的素材性の背後に人間の精神を潜めており，それは理念でありながら，日常の現実空間の中に実現されるものである。従って自然的対象と同じ対象でありながら，そこに人間の目的を含んでいるものである。それ故，デッサウェルはカントの保留した〝物自体〟が，この第四王国において発見されるという。しかも技術的世界は，物自体との再会で終ることなく，歴史的社会的な人間の創造の中に，人間が圧倒され改変されてゆく世界として捉えられなければならない。それは，宇宙自身，人間を越え，単なる自然的宇宙を越えた真の宇宙，デッサウェルの言葉を使うなら，メタコスモス自身の顕現である。(Philosophie der Technik, s.9, s.10, s.32, s.50, s.52)

このようなデッサウェルの考え方は，カントの目的論を踏まえている。技術は，人間をも，自然をも包みこんだ宇宙の目的論的な発展を基礎に考えることによって，はじめて首尾一貫した洞察がなされるものである。

2. 技術の美

技術のダイナミズムを理解することにより，我々は技術が創りだす新しい美を発見することができる。目的の充足とともにあらわれてくる美，技術美は，自然美や芸術美とは異なるものである。しかし，それは，美の追求のみを目的としたものではなく，環境を形成するものである点は自然美に似ているし，人間の手によってつくられるという点は芸術美に似ている。

技術美は，成程，目的の充足による有用性の顕現と強く結びついている，が，それは役立てば美しいのだという方便的なものではない。明確な目的を持った技術文明の中で，物自体に出会おうとする努力の中に生まれてくるものである。技術美が幾何学的形態によって表現されることが多いのも，それが無駄な装飾を省いていて機能的であるという理由からばかりではない。幾何学における円や直線は，人間の理念であると同時に，紙の上に描かれた客体である。物自体を貫いている幾何学的形態に対する志向があるからである。物自体との出会いが自然形態の中に埋没してしまうことのない幾何学的形態，理念的形態をとることを要求するからである。

竹内敏雄氏は，この技術美の問題に関して次のように述べている。

「技術的使用対象が美であるためには，実際に有用であることを必要とせず，ただ有用であるようにみえること，有用なものとして現象することが問題なのである」。(現代芸術の美学，88頁)

我々は，技術美に関して，有用であれば美しいと言って終ることはできない。が，同時に竹内氏の，機能性の表現としての技術美の定義にも満足することはできない。

機械技術の登場は，これまでの美のカテゴリーから測ることのできない新しい美を生みだした。しかし，技術美の問題は表現すべき新しい対象が登場したことに終るものではない。機械技術の隆盛が人間の感受性を変容せしめている

ことの方が重要である。技術美は我々を取り巻く技術的環境の側から一方的に成立してくるものではあり得ない。科学技術の発達が直接に機能美を誕生させたというより，科学技術の進展とともに我々の中に育まれてきた機能に対する感受性がその成長を促したとみるべきではなかろうか。

河本教授は，機能的センスをこの機械技術的環境の中から生まれた特殊なセンスであると説明し，それを実生活への展望，理想を見いだすセンスであるとしている。そして，機能的センスによって見いだされる美は，生活を眺望することから生ずるものであり，そこで感得される機能美は，実生活上の意味や概念と不可分に結びついており，カント以来我々が理解してきた絵画や彫刻における美(Schönheit ohne Interesse) とは異なるものであると教えてくれる。カントによれば，美の判断は主観的合目的性によって行なわれるものであり，客観的合目的性，即ち対象の有用性と完全性とは美の判断に関わりないのである。しかし，有用性がそのものの存在と表象に滲透している技術的所産において，カントが定義するところの趣味判断の美のみを取りだして論ずることは難しい。有用性を軸としている技術的所産においては，常にその完全性が問題である。座り心地の悪い椅子，切れ味の悪い剃刀は，我々を不快にするに充分である。カントの生きた時代にあっては，概念を通して間接的にしか理解されなかった有用性と完全性とは，急速に進展する技術環境の中で直接感覚的に捉えられるようになってきているのではないだろうか。

機能美に関しては，趣味判断の場合の美の無関心性，概念に関わらない普遍妥当性といったものはあてはまらない。むしろ，逆に，生活に対する関心と意味の問いかけの中に，この技術的世界を積極的に生きてゆこうとした時に，はじめて理解されるものであるといえる。機能美の妥当性は，機能的効果の及ぶ範囲，人間的意味の理解される範囲に限定される。このような機能美は，芸術作品の中に表われた無限定な豊饒な美に比して，人間存在の合理的側面を一方的におしだしている観がある。人間の非合理的な側面，その実存的契機がデザ

イン所産の中に表現されることは難しい。しかし，それ故にデザイン所産を人間存在の根源に迫り得ない皮相なものと速断するのは誤りである。技術的所産，デザイン所産が現実の生活空間の中で一定の行為を可能にする媒介者であることに注目するならば，デザイン所産が形成する空間こそ，我々の現実存在の場であることに気づくだろう。

芸術作品の豊饒な美の秘密は，芸術家の創造体験のうちに内在している。我々は芸術作品を媒介に創作者としての芸術家の実存に，追体験を通して迫りうるのみである。しかしデザインの鍵は我々生活主体者自身の中にある。デザイン所産を通して行為する我々の〝事がうまくゆきそうである〟という機能的センスを満足させてくれる快活な感動こそ，デザインの美を成立せしめているものである。デザインの美は使用者の行為のうちに成就するものである。デザイナーは使用者のそのような体験を予測しながら制作するのである。

現代人がおしなべて「技術的実存」として運命づけられているのは，合目的的計算と合目的的作用をもって生産機能を完遂することを生活の原理とせねばならないからであるという。(竹内敏雄　現代芸術の美学, 4頁)。しかしこれからの時代を生きる人間の技術的実存にとっては，生産機能以上に消費機能，使用機能が問題となってゆくであろう。

デザイナーがつくりだすものも，デザイン作品ではなく，デザイン所産を媒介とした機能と，生活の方向づけである。デザイン所産を特徴づけているのは，使用者がその機能の脈絡に沿って行為する使用プロセスである。従って，我々がデザインにおける創造性の問題を技術の側からアプローチしようとする場合にも，生産の技術とそこから生まれてきた技術美について云々するだけでは充分ではない。使用技術とそのプロセスの中に体験されるデザインの美の特殊性についても検討を加えなければならない。この使用技術こそ現代技術を特徴づけているものである。

3. 第二の技術

カントの時代の技術は手工芸であり，デッサウェルの時代には機械技術に変った。しかし現在，機械技術も，更に新しい局面を迎えた。デッサウェルの主張する，自然を人間の理念によって貫く技術を第一の技術であるとしたら，新しい技術は第一の技術が生みだした機械的技術を再び人間の側にひきつける第二の技術である。

この第二の技術についての説明を，情報論から美学を論じたマックス・ベンゼの言葉の中にみつけることができる。

ベンゼは技術を二種類に分けて説明し，彼によれば，ひとつはニュートンの法則によって支配されている古典的機械的世界の技術であり，その生産は労働やエネルギーであり，物質的世界に向けられている。その典型はアルキメデスの挺子である。いまひとつは，ファラデーとマックスウェルの法則によって支配されている熱力学と量子論の世界の技術である。それは情報とコミュニケーションの生産を行なうもので，次第に我々の意識と精神の行為に侵入してきているものであり，その典型にパスカルの計算機が考えられる，としている。
(Aesthetica, s. 189)

ひとつの技術的所産の誕生は，直ちに使用のための意識操作を必要とする。操作を司るこの意識機能が，次には技術の新しい場として登場してくることに不思議はない。サイバネティックスの原理が，非常に短期間に，機械における自動制御装置として，情報産業の躍進として，経済，経営，その他の領域におけるコンピュータの使用として，多方面に滲透し，各分野で画期的な成功を収めていることは注目に値する。これは，各分野で機械生産技術の恩恵が充分に行き渡り，新しい技術の誕生が俟たれていたことの証しであろう。

さて，デザイン所産は一般に，単なる技術的所産と区別することが可能である。その場合，デザインは，自然必然性と人間の側の目的とを媒介することに

よって生まれた技術的所産を，その使用に際して更に人間の側にひきつけるための第二の技術であるといえる。現代機構の中では，デザイン制作が技術的所産の生産分野と緊密に結びついているため，しばしば，デザインとは生産プロセスの一領域であると勘違いされている。しかし，デザインの問題は使用プロセスの中にあり，たとえ，それが現代の企業の生産プロセスで計画されるものであっても，志向すべきところは生活の場の中の具体的な使用操作の段階である。

先に論じてきた機能美の特殊性も，第二の技術としてのデザインの立場から考えてみると更にはっきりする。デザインの美は，制作者の手から創りだされるものであるより，むしろ使用者の意識操作の中に密むもののように思われる。デザインの美のうつろいやすさも，それが使用者の意識と社会の要求の変化の中で測られるものであるからである。

我々は，「機能美は，その機能的合目的性それ自身のために喜ばれるのではなく，その表現としての形態化にはじめて機能美が成立する」（美学新思潮講座第四巻，47頁）という竹内氏の機能美とは違った機能美のありかを探してきた。表現としての形態化から生まれた機能美は，鑑賞者の眼を固定し，その心を感動のうちに沈潜させなければならない。しかし，現実の生活の中で我々が触れる機能美は，環境の全体構造の中で我々を勇気づけ，行為へといざなう美である。

自らがデザイナーであるナギーの言葉は，的を得ている。「日常の使用を目的としたものは，決して聖なる器でもなければ，熟視すべき対象でもない。まず第一にその機能が十分であると同時に環境とも大切な関係を持っていなければならない」。（The New Vision, p. 30）　日常の使用機能を目的としたものは，熟視されるべき対象ではなく，人間の行為によって乗り越えられるべき対象である。使用する人の意識をそこに凝結してしまうことを許されない機能的デザイン所産の美は，乗りこえられるべき対象の中に表現された機能性でもな

いし，またそれを静観的に眺める我々の認識能力の調和でもない。造形芸術に関する美学の問題は，一般に美を視覚上に限定することにおいて成立しているわけであるが，デザインの美はそこに固定してしまうことはできない。デザイン固有の機能美は，むしろ外観の形態の知覚が終ったところからはじまるのである。

機能美は享受されるものではなく，体験されるものである。行為することの中につくりだされてゆくものである。芸術の美が，イメージとしての意識を行為を通して形へと具現されるのとは対照的に，デザインの美は，形の美しさが行為へといざない，やがて意識の中へ解消されてしまうものである。デザイン所産の形態は完全に計画されたものであればある程，使用プロセスにおいてその形態は我々の意識の奥へと消えてゆく。私の手が身体の一部としての手であり，万年筆が物としての実体性を持っている限り，私の書くという行為，万年筆の書くという機能は完成されない。私の手が消失し，万年筆の形態も消えて唯私の中にある思いが文字となって方眼を埋めてゆく時に，私の手と万年筆はその機能を最高に発揮したのである。

逆に健康を損っている時，人は最も機能的であるべきはずの自分の身体を重っ苦しい実体感でとらえている。だるい腕をあげて書棚の本を取る時，私は腕を機能に対する抵抗の重さに自分の身体であるより，自分の意志を拒絶する物体として感じるのである。

我々は無数の存在物に取り囲まれている。それらすべてを熟視すべき対象として捉えていたら，疲れ切ってしまうか，悪くすると気違いになってしまう。サルトルの小説「嘔吐」の主人公，ロカンタンを襲う嘔気とは，健康な現代人が共通に具えている機能的センスを水先案内に対象を乗り超えて行為することを忘れてしまった現代知識人の弱さのシンボルでなくて何であろう。

アンチテアトルの劇作家，イオネスコの「新しい下宿人」も，そんな現代人を諷刺している。新しい下宿人の部屋に家具が納められる。次々と運ばれてく

る椅子，机，テーブル，洋服箪笥，靴箱，等々の中に人間の姿はかき消され，明かるさを増した照明の中で積みあげられた家具が生き生きとその存在を主張している。

我々はそれが何であるか，如何なる機能を持ってそこに存在しているかを知らずに，その物の存在に無関心になることはできない。針の無い時計，座ることを拒否する椅子，目的を持たないオブジェは，否応なく存在の領域において我々と関わり合う。行く手を遮る異様な自然石は，ロカンタンが，マロニエの木の根に感じたと同じ吐気を我々に催させるかもしれない。しかし，石に文字が刻まれており，それが墓石であったなら，我々はそこに眠る故人に黙祷を捧げながら通り過ぎるであろう。人の手によって意味を定められた石，墓石は決して我々をその存在をもって脅かすことなく，我々はその石を媒介にして惹き起される一定の行為のうちに安らうであろう。

カント美学において，実在への関心を捨て去った時に美的享受が可能となったように，実在への固執を離れた時に，はじめて人間的意味が明らかになるのである。自動車は物としての存在性を捨てて動きはじめた時に，移動という人間的意味を完成すると同時に，その機能美を充全に開示するのである。家屋は建物自体の物体性を希薄にしてゆくに従い，人間的目的，居住を露わにするのである。技術的所産においては，物の存在から人間的意味を抽き出してくることが必要である。同時に，技術的所産は我々人間が技術の系の中に入りこまない限り，言い換えれば，人間が技術化しない限り，その意味を開示しない。機能美を体験するためには，機能的センスを水先案内に現代の技術的環境の中に雄々しく生きることが必要であったことと同様である。

自動車は人間的理念によって貫かれたものであり，人間の客体化されたものであり，それ自体，人間である。逆にそれを運転する人間が自動車とならない限り，自動車の人間的意味，即ち走るという機能を発揮させることはできない。使用プロセスを完成するためには，それは同時に機能美を充全に体験すること

でもあるが，そのためには我々が技術の系の中へ，即ち技術的所産の形成する場の中へ降り立つことが要求される。そしてこの技術的な場の中にあっては，人間もまた従来の実体性を失なって，機能的連関の中へと消失されるべき一個の物と化するのである。

4. 技術の場と社会技術

人間が唯一的な尊厳性を失なって機能的連関の中に消失した今，我々は唯ひたすら技術的環境の苛酷な人間疎外の状況を歎かなければならないのであろうか。

否，人間と技術的所産が相互に滲透しあう場のあり方を前提とすることなしには理解できない技術的状況に示唆を与えるものとして，日本古来の行為的芸術がある。茶道を例にとってみると，ここにはいわゆる芸術作品は存在しない。強いて言えば，名器を使用しながらの行為そのものが芸術的所産である。この行為は茶道具の物体性を剝奪して機能的連関の中へ消失させながら，人間自らが茶道具の側からの要求に従って物質的形式の中に消えた時に生まれてくるものである。いわばそうした，人間と物との出会いの存在論的な場を形成しているのが茶道の美ではなかろうか。この場において人間疎外を云々するものはいない。逆に，人間が茶道具によって指し示され，いざなわれた機能的連関の中に安らう時，人間存在が開示されてくるのである。日本の芸道は，道，修道であり，この悟りの境地を求めたものではなかろうか。

茶室の中の茶人の手の中に在る器も，あるべきところに安らっている。そしてその機能を充全に果している。ハイデッガーが，存在の中に安らうものこそが有用である，（美学新思潮講座第一巻, 68頁）といったのも，このように考えてくるとよく理解される。

技術的所産は徒らに現代技術の先端を衒うものであってはならない。そのようなものは我々に生活の場の中に解消した機能を指し示すどころか，逆に生活の場から浮き上ったあまりにメカニックな風貌故に，無気味な存在感で我々を脅すであろうから。機能的なもの，即新しいもの，機械的なものと決めてしまうのは間違いである。古いもの，その風土に根ざしたものは，スタイルが非機能的に見えても，その地の生活の中では極めて機能的であることが多い。ゴッホの描く古靴はたとえその先が破れていようとも，存在に安らっている限り機能的である。茶器は形が古くとも，茶人の手の中でその存在を安らう限り，機能的である。

我々に示唆を与えてくれるのは，古い日本の行為的芸術ばかりではない。行為に関するメルロ＝ポンティの新しい研究も，生物の行為が常に全体的状況，場において成立するものであることを示している。メルロ＝ポンティは，刺戟・反応という実験心理学のいわゆる反射行動を実験室の中でつくりあげられたものであるとし，生活圏内での生きた行動とは，全体的な生活状況に対する生物学的な反応であることを指摘している。そして更に，刺戟を選びとる側にあるものも，それぞれ或る運動のために用意されている多くの解剖学的装置ではなく，それに依存する反応に一般的性格を与えるような調整系であろうと推察させる。（行動の構造, 112頁，162頁）従って生物の存在は，生物体と，状況の中に一般的な脈絡を見いだすような調整系によって開かれる環境との関係の場として理解される。生物に具わっているこの調整系は，今まで本能という言葉で言い表わされてきた，自然に対する極めて機能的な脈絡であった。我々人間も生物である限り，技術的な場における我々の反応は，状況の物理的特殊性によってより，生物学的法則によって規定されていると考えなければならない。従って技術所産と我々が形成している生活の場を貫いている，人間的，生物学的法則に適った行動の機能的脈絡が重要な問題となっている。技術的な場の脈絡は，種のア・プリオリによって決定された本能が繋げるものではない。機能

的センスが対象の持つ意味を読み取り，自らの眺望する生活に即しつつ，繋ぎ変えてゆくべきものであろう。機能的センスとは，技術的環境において，その生死を握る第二の本能である。神が自然環境と生物体を本能という脈絡で繋いだように，我々は技術的環境と人間精神を機能的センスを通して脈絡づけなければならない。

生物にとって自然は本能を唯一のチャンネルとした厳しい環境であったが，人間にとっては多様な解釈を許す母なる自然であった。現在の技術的環境は人間の側の解釈の多様性を許す余裕はない。しかし，技術の飛躍的な発達，殊に第二の技術，使用技術，ソフトウェア技術の発達は，我々自身の多様な生き方によって選択できるソフトな技術環境をつくりだすことを可能にするであろう。我々の選択の可能性を最大限に生かすのは手工芸的装飾的デザインではない。むしろ機能的なデザインである。装飾の多様さや製品の機種の多さではなく，我々の行為の脈絡の中にこそ，多様性があるべきである。

ここまで，使用プロセスが技術の場を前提とすることを見てきたのであるが，この技術の場は個々人の生活空間は勿論，更に集団の生活の場としての社会全体を含むものである。技術やデザインが不当に批判される場合，それは技術やデザイン自体の問題より，技術やデザインの場である社会の問題であることが多い。しかし，技術やデザインは，社会と切り離して論ずることはできない。むしろ，これからの技術やデザインは，社会と積極的に関わり，自らの新らたな責任に開眼しなければならないだろう。

デッサウェルは経済と技術を峻別し，経済を技術を貶めるものとして糾弾している。彼によれば，一般に機械技術の発達の結果生じたと考えられる社会悪は，すべて経済にその責任があるのである。(Philosophie der Technik, s. 24) 神に代って人間を重労働の苦渋から解放し，人間生活に現実的な福音をもたらすものとして技術を考え，その発展を希求するデッサウェルにとって，それは当然の帰結であった。しかし，経済は機械生産技術を更に社会の中に組み

入れる技術として機械生産技術を操作し，人間の高貴な理念によって貫かれた技術を台帳の数字として処理してゆくであろう。そればかりではない。経済成長率の更新という数字の至上命令の下に，現在，技術は豊かな第四王国を現出せしめる代りに公害地獄の中に人類を滅亡せしめつつあるのである。

ここで我々は，デッサウェルの技術を更に新しく捉えなおさなくてはならない。真に技術の第四王国と出会うためには，機械技術を人類のニーズの下にアセスメントする第二の技術を考えなければならないだろう。

三木清は，技術を正しく人間福祉のために再編成する社会技術の問題を早くから取りあげていた。

「大切なことは技術の計画化である。しかるに技術を馴らすということはそれ自身またひとつの技術，自然科学技術でなくて，社会科学的技術に属することである。」（三木清全集第7巻，280頁）

「技術の害悪が語られる場合，その技術を支配すべき他の技術の存在が忘れられている。いわゆる技術時代の悲劇は，技術は単に自然科学技術のみではなく社会技術というものの存在すること，両者の間には因果的に密接な関係があること，従って諸技術の間に正しい目的・手段の自律的・依存的関係が樹立されねばならぬことを理解しないところにある」。（同上，282頁）

三木清は，技術とは主体の知識を基礎として環境に対する働きかけであるとし，我々の環境であるのは自然のみではなく，社会も環境であることから，自然に対する技術があるように社会に対する技術，社会技術（Sozialtechnik）が存在すると考えている。そして産業革命の結果として生じた最も困難な問題が社会問題であることを考えると，むしろ社会的政治的技術が現代の技術として特に重要であるとしている。

技術は人間を疎外に追いやった。その疎外から人間を救い技術をもう一度人間化するのも，技術を措いて他にはない。その技術は物のメカニズムに関わる技術ではなく，人間と社会に関わる技術である。

三木清の提案が具体的に社会工学という学問として登場するためにはシステム工学の発達が必要だった。Social Engineering また，Application of System Engineering for Social Problems として米国に発達し，社会問題，都市改造等を中心に外交問題にまで応用されている社会工学の誕生は，現代の多様化し深刻化した社会・政治の問題が政治家個人の判断で解決できる枠を越え，工学的な操作を必要としたからである。このように多様化した現代社会の中で，お互いの幸福に抵触しない社会福祉の道をみつけだすためには綿密な分析と操作技術が必要である。技術を社会的にコントロールするとともに，社会を技術的にコントロールすることが必要になってきている。

おわりに

社会技術が人々の生活を真に豊かなものとする時，それは工学というなまの技術ではなく，即ち，操作する側の技術としてではなく，文化という生活主体者の生活技術の総括として考えられなければならないだろう。宗教や封建的な道徳規範によって生活の枠組を確保していた時代ではない現代の新しい生活の主体性，それは生活を設計し，デザインしてゆく行為の中に育まれつつあるのではないだろうか。

かって不条理な自然の猛威の前に無防備な生活をしていた時，人間は宗教や哲学を操作不可能な環境としての自然に対する技術として使用した。自然の合目的性という概念も不可知的な自然を，一個の完全な連関を保つような経験に達するために，人間が用いた技術であることをみてきた。

宗教や哲学は現実空間の変革より，むしろ感情のダイナミズムの合理化の中に平安を求めてきた。禁欲ではなく，欲求を現実の高度技術社会の中へ開放するだけの生活技術を各人が持つことによって，生物学的な基本的な人間性を保

障してくれる社会をつくってゆくことが必要な時，デザインはその有効な態度となるのではなかろうか。優れたデザインの論理を提示した人々が，デザインをデザイン形態の制作に限定してしまうことなく，喜びのある生活を可能にする技術として，或いは技術的世界を生きるために現代人が持たなければならない生活の態度，生活の哲学として考えたことは我々を勇気づけてくれる。

デザインの創造性は，デザイン所産の創造の中だけでなく，ひとりひとりの人間の生活の創造の中に，そしてそれらがからみ合って創りだす，自然を越えた新しい王国，メタコスモスの創造の中に存在するのである。

引用および参照文献

Immanuel Kant; Kritik der Urteilskraft herausgegeben von Felix Meiner, 1963, Berlin.

Friedrich Dessauer; Philosophie der Technik, 1927, Bonn.

Max Bense; Aesthetica, 1965, Kulmback.

László Moholy-Nagy; The New Vision, 1928, New York.
Vision in Motion, 1947, Chicago.

河本敦夫「デザインに於ける統一原理」（京都工芸繊維大学「人文」第16号）
「デザイン空間」（関西意匠学会機関誌「デザイン理論」Ⅰ）
「記号と機能的センス」（美学会誌「美学」49号）

竹内敏雄　現代芸術の美学　東京大学出版会

美学新思潮講座　第一巻「芸術の実存哲学」　美術出版社
第三巻「芸術記号論」
第四巻「芸術と技術」

J・P・サルトル　「存在と無」松浪信三郎訳　人文書院
「想像力の問題」平井啓之訳　人文書院
「弁証法的理性批判」竹内芳郎・矢内原伊作訳　人文書院

メルロ＝ポンティ　「行動の構造」滝浦静雄・木田元訳　みすず書房

ハイデッガー　「技術論」小島威彦・アルムブルスター訳　思想社

三木清全集　第三巻，第七巻，第八巻　岩波書店